

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(出題の都合上、本文の一部を変えています)

小学校五年生の「僕」は、父親の東京への赴任にともなって、弘前(青森県)の小
 学校から青山(東京都)の「南小学校」に転校してきた。当時は、義
 務教育である小学校六年間を卒業すると、そのまま家業を手伝う者もいたが、過半数
 の者は二年間の「高等科(高等小学校)」に進学し、その他、受験して三年間の「中
 学校」に進学する生徒もいた。「南小学校」は東京府立の中学校へたくさんの生徒を
 送り込む進学校であり、「僕」の母親は、「僕」を府立中学に合格させるべく、夫の赴
 任に先立って東京に出てくるほど教育熱心だった。

夏休み最後の日は、電車通りにある善光寺様の縁日にあたっていた。日が暮れるとゾロ
 ゴロはげしい人通りだ。父は留守で(しよつちゅう父は出張ばかりさせられている)僕は
 母と見物に出掛けた。ちようと鳥津さんの空地のままで西郷という子から声をかけられ
 た。その子は低いガツシリした体つきで、デッド・ボールのときは組中で誰よりも物凄
 い火のような球を投げてよこすのだ。そんな子が声をかけてくれるとは意外だった。なが
 い休みのあとで、ヒョククリ顔をあわせると、僕は「親しみがわいた。
 西郷は姉さんと一しよだった。僕らは一層男の子らしく簡単な言葉だけで別れたが、別れ
 ぎわに僕は姉弟の声をききつけた。

「あの子、なんて子？」
 西郷がこれに答える。姉さんの声は遠くからだが、ハッキリきこえた。……「可愛い子
 ね」

僕は、それで A 嬉しくなった。店々のマタタク灯をみながら、東京へ来て初め
 ての友達を見つけたような気がして、弘前であつめて秘蔵している猿飛佐助の写真を半
 分、西郷にやるうかと思つたくらいだ。歩いていて心がハズむようなことは、ずい分しば
 らくないことだった。善光寺様の本堂は立ちこめるお線香の煙とローソクの焰で、全体が
 花火のように浮きあがつて見えた。僕は、お母さんの手をグイグイ引っぱって歩きなが
 ら、B 酔っぱらったようにシャベリどおしにしゃべった。何と軽率なことだろう。
 あれほど警戒してたくせに、友達のことから、学校のことまで作りごとを交ぜながら一
 生懸命話していた。境内には夜店が行列していた。鈴のついたオマモリ袋や、ハッカパイ
 プや、新發明の大根オロシ器は、つまらなかつたが、ブリキ製のシャープペンシルに気を
 ひかれた。赤と青のシンが普通の文具店で売っているのとはちがつた仕掛けで出てくるや
 つで、色眼鏡をかけた人が函のなから一本一本、大事そうにとり出しては、どんな風に
 にぎつてもラクに書けることを示すために斜めにもつたり真つ直ぐ縦にもつたりしなが
 ら、マルや三角やウネウネまがつた線を C かいていた。いつまでも見ようとすると
 僕を母が引っぱつたが、あきらめにくかつた。

「あんなのがあると地図をぬるとき便利なんだがな」

効果はあつた。しかし、どっちかと云えばお母さんはまだフトコロの中の財布まで手を
 もつて行くのがメンドクサそうに見えた。僕は手をゆすぶりながら、D 云つた。

「宿題になつてるんだよ」

お母さんは僕を見た。もう、すこしだ。僕はヤツキになつて考えずに云つた。

「ウンと出てるんだ。夏休みの宿題がこんなにあるんだ」

金を出しながら母の眼は急に、けわしく光りだした。冷たいエンピツを手に、にぎらさ
 れてようやく僕は苦心して掘つたオトシ穴の中に自分からはまりこんで行くのを知つた。
 もう一刻も早く家へ帰りたいかつた。ただそれだけだ。

母は何も知っているわけではなかつた。子供がソワソワするのを、うれしがっている
 勘違いした。七月二十一日の日付けから真つ白のままの宿題帖をみて、はじめて母はギク
 リとした。しかも、そのあとから九冊も白紙の帖面がでてくるので、一ぺんに僕以上の厭
 世観に取りつかれた。泣き出した母を見て、僕はどうしていいかわからなかつた。

「お前も死になさい。あたしも死ぬから」

と云うのをきいて僕は、それもいいと思つた。しかし母は、ガスを管をもつてこいと云つ
 たくせに、僕が台所へそれを取りに行こうとすると、E 僕を引きずつて机の前につ
 きすわらせ自分もエンピツをもつて帖面にしがみついた。もうこうなつては仕方がない。
 母と僕は帖面を片つぱしから、よこすことに熱申しはじめた。一分間も休むヒマはなかつ
 た。腕が重い棒みたいになつて指からエンピツがころがり落ちそうになる頃、僕は宿題の
 やり方が、だんだんわかつて来た。迷わないで書けるようになった。算術は答えだけ書く
 ことにした。二十三桁ものものすごいカケ算も、数字だけ書けば一分間で七題でも出来

た。応用問題のツルカメ算は、問題を読まないでも、ツル十びき、カメ三びきと書けば、
 それでもすんだ。どうせ考えて間違えるくらいなら同じことだ。僕がスバラシイはやさで
 片づけはじめると、母は F 心を感じた。

「北海道ノ主ナル海産物ヲ九種類アゲヨ。ソシテソノ産地ト一年間ノ収穫高ヲ書ケ」と云
 う問いにぶつかつて、かんしゃくを起こしながら、
 「コンブ、まぐろ、かつお、……」などと大きな字で書きはじめるのだった。

しらないうちに明るくなった。あんなに大冒険だと思つていた徹夜も、やってみると、
 はかないものだ。それよりも明日がそのまま消えて G になつてしまったことが、何か
 にダマされたようだ。朝モヤの中から射してくる日が、なんとポカポカ暖かいだろう。
 宿題が終わつたのは七時で、それでちょうど良かった。あんまり早く出来すぎてはデタラ
 メな答案が気になるころだった。

九月一日は勉強はなかつた。教室では級長が宿題をあつめた。この子のために僕は一度
 昼休みにパンを買いにやらされたことがある。級長が忙しい役目だと云うことを知らせる
 つもりだつたらしい。復讐する気じゃなかつたが僕は蛸パンと云うタコの踊っている形の
 パンを買つてやつた。するとそこへ彼のお母さんがサンドウィッチをどけにやつて来
 た。その人は息子が蛸パンをもっているのを見て機嫌を悪くした。級長はお母さんの前で
 オドオドしながら僕を恨みつぽい眼つきでにらんでいた。宿題帖をあつめながら級長はど
 う云うわけか僕を一番下にばかりした。そいつは偶然のことかもしれない。だが僕の方
 は、それでゴマカシの宿題がすこしは助かるような気がした。宿題が全部あつると、金
 原先生は云つた。

「お前たちの休みはこれで終わった。再来年の春、お前たちのこれからの一生を左右する
 試験のすむまでは、もう休みはない」

お前たちの一生を左右する、と云うのは南学校全体の合言葉で、式するとき、朝礼のと
 き、その他しかられたり、あらたまつたことのある時はいつでも出てくるし、綴方の最
 後ほどどんな題でも「いよいよ僕らの一生を左右する試験が……」と、みんながかくのだ。
 金原先生は普通の人たちが耳の下からアゴが四角く出つては、物を云うとき
 は、その函のようなアゴがばくばく動いて大きな前歯が出るので、そばに近よると囁まれ
 そうな気がする。僕はたしかに金原先生を恐ろしい人だと思ひこみだしていた。夏休みま
 えまではこんなことはなかつた。先生は僕らの机の間を固いスリッパの音をたてて、ぐる
 ぐると歩きながら、

「きょう宿題をもつて来なかつた人は？」と、立つように命じた。僕は心配と安心の交
 じつた落ちつかない気持ちで、ガタガタと机の金具を鳴らしながら幾人かが立つのを見て
 いたが、その中にあの大熊が入っているのに驚いた。しかも先生は、その子たちの顔をひ
 と通りながめながら、

「よろしい」

と云つただけだ。それから席順のいれかえがはじまつて、僕は前から五番目の、ちよつと
 教室の真んごろへ入れられた。さつき立たされた十人ばかりは窓から一番遠い席へ縦に一
 列に置かれた。学校はもうそれで終わりだ。何のことか僕にはサツパリわからなかつ
 た。ふだん一日ぶんの宿題を忘れて来たときでもその時間中は立たされるのに、それもし
 ない。なおさら、おかしいのは大熊君だ。……僕は帰りの途中で考えた。先生は大熊君が出
 来る子なのを知つていて許したのであろうか。それにしても他の子が叱られなかつたから変
 だ。スズキの豚公まで叱られないはずはない。だとすると宿題といつても別に、たいした
 事ではないのじゃないか。大熊は、僕を田舎者だから驚かしてやれと思つたんだろう。あ
 いつはただ「宿題やつたか？」ときいただけだ。僕は「やつてないよ」と云えばそれで、
 よかつたんだ。弘前じゃ宿題なんて、誰も知りやしない。先生だつて知つてたかどうか、
 怪しいもんだ。それなら東京の学校だつて何もウルサク云わないのが本当だ。もし宿題を
 やつて来ないのが悪いことだとして、そのために立たされるのだったら、弘前の学校は悪
 モノのあつまりで教室に椅子は一つもいらなくなつてしまふ。……結局、ふだん宿題を
 やつて来るのは、立つのをいやがる連中だけだ。やつらは足が弱くてガマン強くないの
 だ。……実際のところを知らないのは僕だけだ。その日宿題をやつて来なかつた大熊
 たちは高等科へ行く子だつた。そんな子は勉強のことでは、どんなにナマけても怒られな
 い。反対にどんなに勉強したつて全甲はもらえない。内申書の席次を、ほかの子にゆずつ
 てやるために。

【注】

- 1 善光寺ぜんこうじ⇨青山善光寺のこと
- 2 デッド・ボール⇨ドッジボールのこと
- 3 猿飛佐助さるびさすけ⇨当時の子どもたちのヒーロー
- 4 ハッカパイプ⇨駄菓子だがしの一種
- 5 厭世観えんせいかん⇨物事の悪い面ばかりを見て悲観的に考える傾向
- 6 綴方つづりかた⇨作文の練習
- 7 全甲ぜんこう⇨すべての科目で成績が最上位であること
- 8 席次⇨成績の順位

問一

□に入る表現として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 敵国兵が社交場で出会ったような
- イ 幼なじみが故郷で出会ったような
- ウ 親友が大都会で出会ったような
- エ 親子が町の中で出会ったような
- オ 探検家が山の中で出会ったような

問二

A □ E □に入る言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(一つの選択肢の使用は一回とする)

- ア いきなり
- イ すっかり
- ウ つい
- エ ひっきりなしに
- オ まるで

問三

線部①はどのような目的からなされた発言か、解答らんにしたがって答えなさい。

問四

線部②について、「僕」がこのように思ったのはなぜか、七十五字以内で説明しなさい。(記号・句読点も一字とする)

問五

線部③について、どのような「やり方」なのか、解答らんにしたがって二十五字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問六

線部④の「□□心」として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 向上心
- イ 競争心
- ウ 羞恥心
- エ 平常心
- オ 好奇心

問七

□に入る二字熟語を答えなさい。

問八

線部⑤について、「僕」の「心配」と「安心」とはどのようなことか、解答らんにしたがってそれぞれ具体的に答えなさい。

問九

線部⑥という思いを抱いたのはなぜか、三十五字以内で説明しなさい。(記号・句読点も一字とする)

問十

主人公の少年はどのような人物か、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 田舎出身であることを強く意識し、東京の学校生活になじめず困惑している
- イ 思春期の少年らしく、親への不信任や反発する思いに常に振り回されている
- ウ 表面上は強がつているが、実は小心者で、友人作りのためならば何でもする
- エ ずるがしこい面があり、常に本心を隠して自分に有利なように行動している

問一 線部 a のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部①について、筆者は「工人たち」をどのような人と考えているか、それを最もよく表している部分を文中より抜き出し、その始めと終わりの五字を答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問三 線部②の○に七字のひらがなを入れ、慣用的な表現を完成させなさい。

問四 線部③について、「これ以上なく辛かった」のはなぜか、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 長年一緒にやってきた職人仲間として、屋根やの遠回しの指摘は他人行儀だと感じたから
- イ 打つ手がなく途方にくれ、屋根やの言葉に対して工人として返す言葉を持たなかったから
- ウ 屋根やの言葉はその状況への指摘だけではなく、自分の技術の未熟さを責めるものだったから
- エ 屋根やの違う視点でその状況を見れば、解決の糸口が得られるかもしれないと期待していたから

問五 線部④には、筆者のどのような心情がうかがえるか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 壮大な古建築の内に秘められてきた測り知れない力と機能に感動したということ
- イ この解体修理に取り組んだ工匠・工人たちのすぐれた技術に感動したということ
- ウ 古建築が経てきた永い歴史の中に隠された不可思議な運命に感動したということ
- エ 今回の取り組みを通して改めて多くの工匠・工人たちの姿に感動したということ

問六 線部⑤について、筆者はどのような点が「みごと」と言っているのか、五十字以内で説明しなさい。(記号・句読点も一字とする)

問七

A

・

B

に入る語として適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あきらめ イ あわれみ ウ いたわり エ ためらい オ こだわり

問八 線部⑥とほぼ同じ意味で使われている言葉を文中より抜き出して答えなさい。

問九 線部⑦の言葉には、Nさんの工人としてのどのような姿勢がうかがえるか、解答らんにしたがつて四十五字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

三 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

鳥が

凍てつく土の上で

棘をふるわせながら

餌を懸命についばんでいる

① 生きるための

何ひとつ飾り気のない姿で

あたらしい春の曙光を

たしかな声でうたっている

木が

からつ風の中で

枝をふるわせながら

冬芽を必死にまもっている

② 生きるための

何ひとつ無駄のない姿で

あたらしい春の曙光を

全身にしっかりと受けとめている

人よ

③ 雑踏のアスファルトの上で

唇をふるわせながら

夢を大きくえがいているか

生きるための

恥じることのない赤裸々な心で

あたらしい春の曙光を

手をつなぎ合って喜んでいるか

人よ

鳥が大空を翔けるように

人よ

木が冬芽を抱くように

人よ

おまえの同胞のいのちを

あたらしい春の曙光のように

つつみこんでいるか

(山本龍生「あたらしい春に」より)

【注】 1 曙光Ⅱ夜明けの光

2 赤裸々なⅡ包みかくしていない

3 同胞Ⅱ仲間

問一 —— 線部①・②とはどのような姿か、文中の言葉を使って、解答らんにしたがい、それぞれ十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問二 —— 線部③「雑踏のアスファルトの上」とは、どのような状況を暗示しているか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無数の人々に囲まれながら孤独感を抱く状況
- イ めまぐるしい社会の変化に不安感を抱く状況
- ウ 科学技術の急激な進歩に伴い恐れを抱く状況
- エ 自然の失われた都会の光景に怒りを抱く状況

問三 第三連・第四連は、第一連・第二連と文末の表現が異なっています。

- (1) その違いを解答らんにしたがって説明しなさい。
- (2) その表現が第三連・第四連で使われているのはなぜか、第一連・第二連と比較しながら六十五字以内で説明しなさい。(記号・句読点も一字とする)

一

問一

--

問二

A

--

B

--

C

--

D

--

E

--

問三

--

という目的

問四

--

問五

--

というやり方

問六

--

問七

--

問八

--

という心配

問九

--

という安心

二

問一

a

--

b

--

c

--

d

--

e

--

問二 始め

--

終わり

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

A

--

B

--

問八

--

問九

--

姿勢

三

問一

①

--

姿

--

問二

--

問三 (1) 第一連・第二連とは異なり、第三連・第四連は

--

(2)

--